

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月17日現在

機関番号：13701

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23800028

研究課題名（和文） 青少年のライフスタイルを評価する質問項目のための疫学的調査研究

研究課題名（英文） Epidemiological survey research for question items to evaluate adolescent lifestyles

研究代表者

三好 美浩 (MIYOSHI YOSHIHIRO)

岐阜大学・医学部・准教授

研究者番号：00452508

研究成果の概要（和文）：本研究は、2種類の質問紙（A調査とB調査）を用いた。データは、2012年1月から3月に実施した全日制高等学校調査から得られた。A調査の有効回答標本は、層別1段集落抽出法により選ばれた5校の高校2年生731名であり、B調査の有効回収標本は、同様に選ばれた9校の高校2年生1,462名である。結果は、3個の主要な成果を示す。(1)各調査における、たばこ、酒、大麻、鎮静剤、精神安定剤の経験率。(2)各調査における7個のライフスタイル変数の全体および男女別の頻度分布。(3)B調査の結果として、アルバイト時間は、所得、授業をサボった頻度、居酒屋などへ行く頻度と正の関連性があり、その反対に、4年制大学卒業の志望、クラブ活動への参加と負の関連性にあること。

研究成果の概要（英文）：This study used two questionnaire forms (i.e., form-A and form-B). Data was obtained from full-time high school surveys conducted between January and March 2012. The sample of the form-A consists of 731 2nd-year students at five high schools and that of the form-B consists of 1,462 2nd-year students at nine high schools, selected from the entire nation by stratified single-step cluster sampling. The results show three central findings. (1) The levels of using cigarettes, alcohol, marijuana/hashish, sedatives, and tranquilizers are shown in each questionnaire form. (2) Frequency distributions of seven lifestyle variables (e.g., work, exercise, breakfast, sleeping, etc.) by total and by gender are shown in each questionnaire form. (3) As a result of the form-B, the number of working hours in a paid job is positively related with earnings, skipping classes, and going out, whereas it is negatively related with aspiring to a four-year college graduation and participating in extracurricular activities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・応用健康科学

キーワード：高校生・質問紙調査・ライフスタイル・薬物乱用・アルバイト・学校調査

1. 研究開始当初の背景

青少年の薬物乱用の現況をみると、2008 年秋から日本の青少年に、大麻乱用の問題が散見されるようになった。高校生や大学生が、大麻乱用や、大麻を販売した容疑で逮捕される事犯が新聞で頻繁に取り上げられた。彼らは、不良や非行と呼ばれる青少年ではなく、いわゆる普通の生徒や有名で偏差値の高い大学の学生であったことから、大麻乱用などで逮捕されることが大きな話題となった。近年まで、日本では薬物乱用者は極めて限定されると見られていたが、若者世代に薬物の広がりの特徴がみられた。現在、2008 年秋からの青少年の大麻乱用は少し落ち着いてきている様子だが、その一方で、「脱法ドラッグ」という新しい薬物乱用の問題も起こってきた。本研究は、これらの問題意識を背景として、日本の青少年に焦点を絞り、青少年のライフスタイルの実態を評価する質問項目を整理するために疫学的調査研究に取り組むものである。

本研究の目指す到達点は、単に青少年のライフスタイルの実態を示すことに留まらず、実証的成果に基づいて健康教育という実践に応用することを含んでいる。青少年への実証に基づいた健康教育に取り組むには、(1) 青少年のライフスタイルの実態を把握すること、(2) 健康教育プログラムの実践とその有効性を検証すること、の 2 点が重要になる。この 2 点は、「実態把握→問題発見→改善の可能性→改善の実践→実態把握（実証的評価）」という一つのサイクル（循環）を相互に構成する要素となる。このサイクルを繰り返すことで、青少年のライフスタイルは、より健康なものとなり、このサイクルを実現するためには、モニタリング・システムの確立と健康教育プログラムの発明が必要とされる。特に学校で取組まれる健康教育の実践は、学校保健プログラムに重なっている。米国の学校保健プログラムは、これまで(1) 学校保健サービス、(2) 健康教育、(3) 健康な身体的および社会的環境を当然のこととする努力、(4) 食事サービス、(5) 体育および他の運動、(6) カウンセリング、心理的および社会的サービス、(7) 組織やスタッフのための健康プログラム、(8) 生徒、組織、スタッフの健康を明らかにするための学校、家族、コミュニティの協力的努力、の 8 課題を掲げてきた。これらの課題への 20 年間の取組みに基づいて、CDC (U. S. Centers for Disease Control and Prevention) のディレクターを務めた Kolbe は、2002 年に学校保健プログラムの 4 つの目的を挙げた¹⁾。それらは、(1) 健康に関する知識、態度、スキルが向上すること、(2) 健康行動(Health Behaviors)および健康的成果(Health Outcomes)が向上すること、(3) 教

育的成果(Educational Outcomes)が向上すること、(4) 社会的成果(Social Outcomes)が向上することである。この内容は、学校保健プログラムで取り組むべき対象領域を 8 課題に整理した段階から、プログラムの評価基準を 4 基準に整理した段階に至ったことをあらわしている。この指摘は、日本の健康教育および学校保健にとっても共通する内容を含んでいる。

プログラムにおける「課題→実践→評価」の過程は、実証に基づいて行われる必要があり、本研究は前述した健康教育システムのなかの実態把握かつ実証的評価に位置づけられる。ただし、年齢層によって問題となる健康、ライフスタイル、体力が異なっているため、本研究では若年層に特化したライフスタイルの実態調査研究に取り組む。

2. 研究の目的

本研究は、我々が継続使用してきた測度(measure)と米国を代表する喫煙・飲酒・薬物乱用調査の一つである Monitoring the Future study (MTF) に基づいた日本語訳の測度(measure)との統計的関連性を検証し、日本の青少年に対する質問項目の発展的な改訂あるいは新規調査の準備に取り組む。将来的に日本の青少年のより健康なライフスタイルを実現するために、健康管理と問題行動の 2 基準からライフスタイルの質を評価する。

そこで、本研究は、健康管理と問題行動の基準を反映させた質問項目によって、青少年のライフスタイルの質を評価することを目的とする。これによって、青少年の健康なライフスタイルへの理解を深めるための質問項目を整理する。最終的に、実証的成果に基づいて、青少年がより健康なライフスタイルを実現するためと、米国、欧州、他のアジア諸国との国際比較をより効果的に行えるために、基礎情報を提供する。本研究は、将来、全国規模のモニタリング・システムを実現するための第一歩として、その基礎的内容を確かなものとする。

3. 研究の方法

(1) 調査概要

本研究は、青少年のライフスタイルを評価するために、2 種類の質問紙 (A 調査と B 調査) を用いて調査を実施した。A 調査および B 調査ともに、調査法は、高校 2 年生を対象とした層別 1 段集落抽出法による質問紙調査法を用いた。高等学校の選定においては、全国を 6 ブロックに分け、各ブロックから調査対象校を無作為に抽出し、調査を依頼した。ただし、本調査は、東日本大震災の影響を鑑み、岩手県、宮城県、福島県の 3 県を除外して調査を実施した。A 調査および B 調査の質

問紙は約 80 問からなり、無記名かつ自記式で行った。調査期間は、2012 年 1 月から 3 月であった。その結果、A 調査の有効回答標本は、731 名（調査実施校 5 校）となった。B 調査の有効回答標本は、1,462 名（調査実施校 9 校）となった。

(2) 倫理的配慮

本研究は、岐阜大学医学研究等倫理審査委員会の承認を得て実施した（23-285「高校生の健康なライフスタイルに関する疫学的調査研究」）。

(3) 質問項目

質問項目の内容は、青少年のライフスタイルにおいて高い重要度の順から、喫煙、飲酒、医薬品乱用、その他の問題行動、運動、食生活、アルバイト、睡眠、生活時間配分、学校生活、友人関係、家族関係とした。A 調査の質問紙は、我々が青少年の喫煙・飲酒・薬物乱用調査において継続使用してきた質問項目を中心にまとめられた²⁾。B 調査の質問紙は、米国を代表する喫煙・飲酒・薬物乱用調査の一つである Monitoring the Future study (MTF) に基づいた日本語訳の質問項目を中心にまとめられた³⁾。

4. 研究成果

(1) A 調査の成果

① たばこの経験率

たばこの生涯経験率は、全体 16.8%、男性 21.4%、女性 11.4%であった。たばこの 1 年経験率は、全体 8.3%、男性 9.6%、女性 6.9%であった。たばこの 30 日経験率は、全体 5.1%、男性 6.0%、女性 3.9%であった。喫煙の結果は、先行研究と同様に、高校生女子よりも高校生男子の経験率がより高い傾向がみられた。

② 酒の経験率

酒の生涯経験率は、全体 62.2%、男性 66.0%、女性 58.0%であった。酒の 1 年経験率は、全体 46.9%、男性 48.9%、女性 44.7%であった。酒の 30 日経験率は、全体 17.4%、男性 17.9%、女性 16.8%であった。先行研究から、すでに 2000 年代後半に高校生の飲酒は、高校生男子よりも高校生女子の経験率が高くなっていることを確認したが、本結果では、高校生女子よりも高校生男子の経験率の方が高くなっている。この結果では、調査規模の影響が酒の経験率に表れていることが考えられる。

③ 鎮静剤の経験率

鎮静剤の生涯経験率は、全体 2.2%、男性 0.8%、女性 3.9%であった。鎮静剤の 1 年経験率は、全体 1.2%、男性 0.3%、女性 2.4%であった。鎮静剤については、生涯経験と 1 年経験ともに、自前の研究では本調査で初めて測定された項目である。鎮静剤の生涯経験及び 1 年経験は、高校生男子よりも高校生女

子の方が共により高い経験率を示した。

④ 精神安定剤の経験率

精神安定剤の生涯経験率は、全体 1.4%、男性 0.8%、女性 2.1%であった。精神安定剤の 1 年経験率は、全体 0.8%、男性 0%、女性 1.8%であった。精神安定剤についても、生涯経験及び 1 年経験の両方が、自前の研究では初めて測定された項目であった。精神安定剤の経験率は、鎮静剤よりも低い値を示したが、高校生男子よりも高校生女子の方がより高い経験率であるという同様の傾向はみられた。

⑤ 現在の健康状態

現在の健康状態についての全体の結果は、「とても健康」30.6%、「まあまあ健康だと思う」60.1%、「あまり健康でない」8.1%、「健康ではない」1.0%となり、高校 2 年生の 9 割以上が健康と感じていて、1 割程度が健康ではないと感じていた。男女別では、高校生男子の「とても健康」32.5%と「まあまあ健康である」57.4%を足すと 89.9%、高校生女子の「とても健康」28.5%と「まあまあ健康である」63.4%を足すと 91.9%となった。高校生女子の健康の割合が、高校生男子よりも少し高くなっているが、男女間の回答分布には、統計的に有意となるほどの違いはみられなかった。

⑥ 朝食

毎朝朝食を食べているかについての全体の結果は、「ほとんど毎日食べている」81.5%、「時々食べる」10.7%、「ほとんど食べない」7.7%であった。高校 2 年生全体の 8 割以上が、毎朝朝食を食べていることを示した。男女別では、高校生男子は、「ほとんど毎日食べている」77.8%、「時々食べる」12.3%、「ほとんど食べない」9.8%であり、高校生女子は、「ほとんど毎日食べている」86.2%、「時々食べる」8.7%、「ほとんど食べない」5.1%であった。高校生男子よりも高校生女子の方が、毎朝朝食を食べる割合が高く、男女間の回答分布には、統計的に有意となる違いが示された。

⑦ 7 時間以上の睡眠

7 時間以上の睡眠時間をとっているかについての全体の結果は、「まったくない」4.0%、「めったにない」17.9%、「ときどき」35.4%、「よく」19.0%、「ほぼ毎日」15.9%、「毎日」6.3%であった。男女別では、高校生男子は、「まったくない」3.0%、「めったにない」17.4%、「ときどき」34.8%、「よく」17.9%、「ほぼ毎日」18.6%、「毎日」6.8%であった。それに対して高校生女子は、「まったくない」5.1%、「めったにない」18.6%、「ときどき」36.3%、「よく」20.4%、「ほぼ毎日」12.6%、「毎日」5.7%であった。「ほぼ毎日」と「毎日」を足すと、高校生男子は 25.4%、高校生女子は 18.3%となり、高校生女子よりも高校

生男子の方が7時間以上の睡眠をとっている割合が高い傾向はみられた。ただし、男女間の回答分布には、統計的に有意となるほどの違いはみられなかった。

⑧アルバイトの週平均時間

過去1年の間に、週平均でどのぐらいの時間をアルバイトに費やしたかについての全体の結果は、「アルバイトをしなかった」77.8%、「5時間以下」3.0%、「5～10時間」6.2%、「11～20時間」8.9%、「20時間以上」4.0%であった。男女別では、高校生男子が、「アルバイトをしなかった」81.6%、「5時間以下」2.8%、「5～10時間」5.0%、「11～20時間」6.8%、「20時間以上」3.8%であった。それに対して、高校生女子は、「アルバイトをしなかった」73.6%、「5時間以下」3.3%、「5～10時間」7.5%、「11～20時間」11.4%、「20時間以上」4.2%であった。アルバイトをしなかった高校生が、7割から8割程度になるが、高校生男子よりも高校生女子の方が、アルバイト経験の割合はやや高かった。ただし、男女間の回答分布には、統計的に有意になるほどの違いはみられなかった。

⑨クラブ活動(部活)への参加

クラブ活動(部活)にどのように参加しているかについての全体の結果は、「積極的に参加している」61.1%、「消極的に参加している」10.5%、「参加していない」28.2%を示した。男女別では、高校生男子が、「積極的に参加している」61.0%、「消極的に参加している」9.8%、「参加していない」29.2%であった。それに対して、高校生女子は、「積極的に参加している」61.6%、「消極的に参加している」11.4%、「参加していない」27.0%であった。男女間の回答分布の比較では、統計的に有意となるほどの違いはみられなかった。

⑩運動部やスポーツクラブへの所属

学校の運動部(部活)、あるいは学校外のスポーツクラブへの所属についての全体の結果では、「学校の運動部(部活)に入っている」50.8%、「学校外のスポーツクラブに入っている」5.7%を示した。男女別では、高校生男子における「学校の運動部(部活)に入っている」55.9%、高校生女子における「学校の運動部(部活)に入っている」44.7%であった。また、高校生男子における「学校外のスポーツクラブに入っている」は5.0%、高校生女子における「学校外のスポーツクラブに入っている」は6.6%であった。高校生男子は、高校生女子よりも学校の運動部に所属している割合が高かった。それに対して、学校外のスポーツクラブに所属しているのは、高校生男子よりも高校生女子の方がやや高い割合であった。ただし、男女間の回答分布において明確に統計的に有意であったのは、「学校の運動部(部活)に入っている」、

「学校の運動部(部活)に入っていない」、「学校外のスポーツクラブに入っていない」であり、「学校外のスポーツクラブに入っている」は統計的に有意となるほどの違いはみられなかった。

⑪運動・スポーツの頻度

運動・スポーツをどのぐらいしているかについての全体の結果は、「週に3日以上」49.2%、「週に1、2日くらい」12.6%、「月に1～3日くらい」9.0%、「しない」28.9%であった。男女別では、高校生男子が、「週に3日以上」55.9%、「週に1、2日くらい」12.6%、「月に1～3日くらい」7.8%、「しない」23.4%であった。高校生女子は、「週に3日以上」41.4%、「週に1、2日くらい」12.6%、「月に1～3日くらい」10.5%、「しない」35.4%であった。高校生女子よりも高校生男子の方が、運動・スポーツの頻度が多い傾向が示された。また、男女間の回答分布は、統計的に有意となり、男女間に違いがあることが確認された。

(2)B調査の成果

①たばこの経験率

たばこの生涯経験率は、全体で12.2%、男性13.9%、女性9.5%であった。たばこの1年経験率は、全体5.5%、男性6.1%、女性4.7%であった。たばこの30日経験率は、全体3.5%、男性3.8%、女性3.1%であった。喫煙の結果は、先行研究と同様に、高校生女子よりも高校生男子の経験率がより高い傾向がみられた。

②酒の経験率

酒の生涯経験率は、全体57.9%、男性55.1%、女性60.7%であった。酒の1年経験率は、全体44.1%、男性40.2%、女性48.4%であった。酒の30日経験率は、全体18.9%、男性16.7%、女性21.2%であった。先行研究では、すでに2000年代後半に高校生の飲酒は、高校生男子よりも高校生女子の経験率が高くなっていることを確認したが、本結果でも同様に、高校生男子よりも高校生女子の経験率の方が高くなった。ただし、この結果は、調査規模の影響が酒の経験率に表れていることが考えられる。

③鎮静剤の経験率

鎮静剤の生涯経験率は、全体0.5%、男性0.4%、女性0.8%であった。鎮静剤の1年経験率は、全体0.3%、男性0.4%、女性0.2%であった。鎮静剤については、生涯経験と1年経験ともに、自前の研究では本調査で初めて測定された項目であった。鎮静剤の生涯経験は、高校生男子よりも高校生女子の方が高い経験率を示したのに対して、鎮静剤の1年経験は、高校生女子よりも高校生男子の方が高い経験率を示した。

④精神安定剤の経験率

精神安定剤の生涯経験率は、全体0.8%、

男性 0.6%、女性 1.1%であった。精神安定剤の1年経験率は、全体 0.3%、男性 0.4%、女性 0.3%であった。精神安定剤についても、生涯経験及び1年経験の両方が、自前の研究では初めて測定された項目であった。精神安定剤の生涯経験は、高校生男子よりも高校生女子の方が高い経験率であったのに対して、精神安定剤の1年経験は、高校生女子よりも高校生男子の方が高い経験率を示した。男女別の精神安定剤の経験率は、生涯経験と1年経験で傾向が逆転するという、鎮静剤と同様の傾向がみられた。

⑤現在の健康状態

同年齢の他の人と比べて、過去1年間の健康状態を全体にどう評価するかについての全体の結果は、「平均よりもかなり悪い」1.6%、「平均よりもいくぶん悪い」12.7%、「ほぼ平均」49.2%、「平均よりもいくぶん良い」23.5%、「平均よりもかなり良い」11.8%であった。男女別では、高校生男子が「平均よりもかなり悪い」1.9%、「平均よりもいくぶん悪い」10.5%、「ほぼ平均」48.3%、「平均よりもいくぶん良い」25.1%、「平均よりもかなり良い」13.4%であった。それに対して、高校生女子は、「平均よりもかなり悪い」1.2%、「平均よりもいくぶん悪い」15.6%、「ほぼ平均」51.1%、「平均よりもいくぶん良い」21.2%、「平均よりもかなり良い」10.1%であった。高校生の男女共に、約5割がほぼ平均の健康状態への回答に集中していて、平均よりも健康状態が良好だと感じている方向への偏りがみられた。そして、高校生女子よりも高校生男子の方が、健康状態が良好だと感じている割合が高い傾向がみられた。また、男女間の回答分布にも、統計的に有意となる違いが示された。

⑥朝食

朝食を食べる頻度についての全体の結果は、「まったくくない」1.2%、「めったにない」2.1%、「ときどき」4.4%、「よく」2.9%、「ほぼ毎日」14.9%、「毎日」74.5%であった。男女別では、高校生男子が「まったくくない」1.6%、「めったにない」1.9%、「ときどき」5.0%、「よく」3.1%、「ほぼ毎日」13.3%、「毎日」75.0%であった。高校生女子は、「まったくくない」0.5%、「めったにない」1.9%、「ときどき」3.9%、「よく」2.6%、「ほぼ毎日」16.4%、「毎日」74.8%であった。「ほぼ毎日」と「毎日」を足すと、高校生男子は 88.3%、高校生女子は 91.2%であり、9割程度の高校生男女が朝食を食べる習慣を身につけている。また、男女間の回答分布には、統計的に有意となるほどの違いはみられなかった。

⑦7時間以上の睡眠

7時間以上の睡眠をとっているかについての全体の結果は、「まったくくない」3.9%、「めったにない」21.5%、「ときどき」37.8%、「よ

く」19.2%、「ほぼ毎日」12.0%、「毎日」5.3%であった。男女別では、高校生男子が「まったくくない」5.0%、「めったにない」18.4%、「ときどき」36.8%、「よく」21.5%、「ほぼ毎日」12.5%、「毎日」5.5%であった。それに対して、高校生女子は、「まったくくない」2.5%、「めったにない」25.4%、「ときどき」38.9%、「よく」16.4%、「ほぼ毎日」11.2%、「毎日」5.1%であった。高校生女子よりも高校生男子の方が、7時間以上の睡眠をとっている割合が高い傾向はみられる。また、男女間の回答分布には、統計的に有意となる違いが示された。

⑧有給あるいは無給の仕事の週平均時間

年間を通じて、有給あるいは無給の仕事に費やしている1週間の平均時間についての全体の結果は、「まったくしていない」84.1%、「5時間以下」5.7%、「6時間～10時間」3.9%、「11時間～15時間」1.6%、「16時間～20時間」2.0%、「21時間～25時間」0.8%、「26時間～30時間」0.3%、「31時間以上」0.6%であった。男女別では、高校生男子が、「まったくしていない」87.1%、「5時間以下」4.9%、「6時間～10時間」3.0%、「11時間～15時間」0.6%、「16時間～20時間」1.6%、「21時間～25時間」0.6%、「26時間～30時間」0.4%、「31時間以上」0.8%であった。それに対して、高校生女子は、「まったくしていない」80.7%、「5時間以下」6.4%、「6時間～10時間」5.0%、「11時間～15時間」2.6%、「16時間～20時間」2.5%、「21時間～25時間」0.9%、「26時間～30時間」0.3%、「31時間以上」0.5%であった。高校生男子よりも高校生女子の方が、有給あるいは無給の仕事をしている割合が高いことが示された。また、男女間の回答分布には、統計的に有意となる違いが示された。

⑨クラブ活動(部活)への参加

クラブ活動(部活)に参加しているかについての全体の結果は、「積極的に参加している」67.5%、「消極的に参加している」16.6%、「参加していない」15.7%であった。男女別では、高校生男子が「積極的に参加している」72.5%、「消極的に参加している」13.0%、「参加していない」14.1%であった。それに対して、高校生女子は「積極的に参加している」61.8%、「消極的に参加している」21.0%、「参加していない」17.1%であった。高校生女子よりも高校生男子の方が、クラブ活動(部活)に積極的に参加している割合は高かった。また、男女間の回答分布には、統計的に有意となる違いが示された。

⑩学校の運動部の部活への参加

今年年に、学校の運動部の部活にどれぐらい参加しているかについての全体の結果は、「まったく参加していない」36.5%、「少し参加している」3.6%、「ときどき参加している」3.1%、「かなり参加している」11.8%、「よく

参加している」44.4%であった。男女別では、高校生男子が「まったく参加していない」25.5%、「少し参加している」2.5%、「ときどき参加している」2.3%、「かなり参加している」11.5%、「よく参加している」57.7%であった。それに対して、高校生女子は、「まったく参加していない」50.0%、「少し参加している」5.0%、「ときどき参加している」4.4%、「かなり参加している」11.7%、「よく参加している」28.5%であった。高校生女子よりも高校生男子の方が、学校の運動部の部活に参加している割合は高いことが示された。また、男女間の回答分布には、統計的に有意となる違いが示された。

⑪運動

積極的に、ジョギング、水泳、健康体操、その他のスポーツなどの運動をする頻度についての全体の結果は、「まったくない」5.7%、「めったにない」15.6%、「ときどき」23.3%、「よく」9.2%、「ほぼ毎日」18.1%、「毎日」27.8%であった。男女別では、高校生男子が「まったくない」3.3%、「めったにない」8.7%、「ときどき」18.9%、「よく」10.7%、「ほぼ毎日」19.4%、「毎日」39.0%であった。それに対して、高校生女子は、「まったくない」8.6%、「めったにない」24.1%、「ときどき」28.3%、「よく」7.5%、「ほぼ毎日」16.7%、「毎日」14.3%であった。高校生女子よりも高校生男子の方が、積極的に運動する頻度は多いことが示された。また、男女間の回答分布にも、統計的に十分有意となる違いが示された。

⑫アルバイト時間とライフスタイルの関連

有給あるいは無給の仕事で働いている高校2年生は、全体の15.1%であった。その内、有給のアルバイトをしている高校2年生が、全体の8.6%、男子の5.4%、女子の12.3%であった。アルバイト時間は、所得、授業をサボった頻度、居酒屋などへ行く頻度と正の関連性にあり、その反対に、4年制大学卒業の志望、クラブ活動への参加と負の関連性であった。すなわち、アルバイト時間が長くなるほど、所得も増え、自由裁量で使える資金も増える。そのため、居酒屋、酒場、ナイトクラブへ行くことも容易になり、実際に行く頻度が増える。ただし、アルバイトの重要性が高くなることによって、学校生活への関わりが薄くなり、授業をサボることが増える生徒も少なくない。それに加え、アルバイト時間が長い高校生は、4年制大学卒業を志望することが少ないという関連性が明らかになった。我が国においても、個人の社会環境や資質の違いがあり、単純にアルバイトが良いか悪いかを結論づけることはできない。しかしながら、アルバイトが、様々な問題行動につながる機会となっていることも実証的に示唆される。

(3)今後の課題

本研究においては、大小様々な課題があるが、その中で当面達成する必要のある課題を以下に挙げる。

- ①本研究で得た調査データについて、さらに分析を進め、成果を発表すること。
- ②大規模な青少年調査に本研究の成果を反映させ、青少年のライフスタイルを測定すること。
- ③国際比較を向上させるために、代表性を高めた調査の実施を実現すること。
- ④将来的に調査データを公開していくこと。

謝辞

本研究にご協力いただきました学校関係者、高校2年生、ならびに、本調査を実施するにあたりご尽力いただきました多くの方々々に御礼申し上げます。

参考文献

- 1) Kolbe LJ, Education reform and the goals of modern school health programs, The State Education Standard, vol.3, 2002, 4-11
- 2) 勝野眞吾, 中村光浩, 三好美浩ほか, 高校生の喫煙, 飲酒, 薬物乱用の実態と生活習慣に関する調査 2009 (研究課題番号21300244 平成21~24年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究代表者勝野眞吾), 報告書, 岐阜薬科大学, 2012
- 3) Johnston LD, O' Malley PM, Bachman JG et al., Monitoring the Future national survey results on drug use, 1975-2011: Volume I, Secondary school students. Ann Arbor: Institute for Social Research, The University of Michigan, 2012

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ①三好美浩, 勝野眞吾, 全国高校生の喫煙・飲酒・薬物乱用とライフスタイルとの関連にみられる性差—2009年JSPAD調査からの成果一、日本アルコール・薬物医学会雑誌、査読有、47巻、2012、211-233

[学会発表] (計1件)

- ①三好美浩, 高校生のアルバイトと学校生活との関連性、日本社会心理学会第53回大会発表論文集、p381、2012年11月18日(筑波大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三好 美浩 (MIYOSHI YOSHIHIRO)

岐阜大学・医学部・准教授

研究者番号：00452508